
どこかの世界の愚かな人

tomato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこかの世界の愚かな人

【NZコード】

N7850Y

【作者名】

tomato

【あらすじ】

悲しからんものいとこにひらくし。

とある憑依した1話

『評価されない人』

他人を評価できない人間が自分を評価してもらえないと憤るのは滑稽なものであろう。

その人は他人に自分が嫌われている理由が分からぬ、なぜなら自分以外の人間を自分以下と考えているからだ。

他人を評価できない人間がその人に評価してもらおうと思うのは甚だおかしい話である、他人に敬意を払えない人間が他人から敬意を払ってもらえないのは当然である。

僕の友人と思つてゐる〇君や△君でさえ人間性としても頭の良さから言つても僕より上なのだろう、だから私は彼らに敬意を払う、だから彼らと友人でいられるのだ、彼らに評価してもらえるのだ。

ふむ…果たして私の手を掴んで無理やり引っ張るこの御仁は誰なのか?

唐突に目覚めた意識、いまだ混濁中、されど周りを見渡すが見覚えのない場所ばかりだ。

どうやら高級マンションの渡り廊下らしい、私の手を掴んでいるふくよかな、悪く言えば太っている男性はこちらが痛くなるレベルで私を引っ張っている。

しかし太っていると言つてもこの男背が高い私は身長は高いほうだと思っていたが一倍もの慎重さがあるとはいはや私が子供のようではないか。

「……？」

先ほど通り過ぎた消火器の大きさに疑問を覚えた、大きい、しかも私よりは大きくないがかなりの大きさだ。

なるほど、体を見ると見覚えのない可愛らしい服装になっていた、靴も女の子が着るような服に…ここまで考察すれば後は簡単なもの、どうしてかは分からぬが私は憑依したらしい？

何が「なるほど」なのかは分からぬが。

確か、最後の記憶は大学から帰つて自室で寝たはずだつたのだが…世の中とは不思議なことがあるものだ。

ところでさつきから私の手を強く引っ張るこの男性は誰であろうか、自分が子供、それも小学生程度の背丈と言つことから考へると保護

者か兄だろ？

しかし背中しか見えないこの太った男には人の配慮も慈しみも見えないことからその線はないだろ。

斜め後ろから見える男は口元を歪ませブツブツと呟いている。

「犯す、お犯してやる、僕はやつちやるんだ、ぼ僕は弱虫じゃない童貞どもめ、どうだ、うらやましいだろ…」

何とわかりやすい、夢ではなかろうかと言つほど典型的と言つか浅はかと言つか、いつそ夢であつてくれと思つほどにつまらない男だ。

男が立ち止りパツパツの「ゴムのズボンから鍵を取り出そうとした、その間も手は握つたままで汗と肉質が気持ち悪い、暇だったのを観察していると分かつたのだがズボンの股間部分が少しだけもつこりとしていた。

なるほど興奮している、これからのお楽しみに興奮と言つわけだ。

鍵を取り出した男が鈍臭い動きで扉の鍵を開け私を先に入れようとする、そこでむしろ私は踏込一気に走り抜ける。

「あ、おい…！」

ぬるりと汗で蒸れていた手と手は簡単に外れ私は土足のまま肥つた男の部屋に入つていった。

まず台所を探した、包丁を探すためだ、いくら他人の体とはいえ自身は私なのだ、好きにさせるわけにはいかない、この子の後の一生はとても残念だがそうせざるを得ない。

暖簾の懸けてあつた場所をくぐるとキッチンがあり食器乾燥機に包丁が入っていた、もう何日もそのままのまゝのか埃をかぶつていて周りを見ればカツチーフや焼きそばの白い…あれだ、あれ白いあの発泡スチロール、

「的なもの…か?」

何か違う気もしたが足音がしたので集中することにした、このまま暖簾をぐぐつたら擦れ違い際に腹を横に切つて驚いている間に深く突き刺して留めをさそう。

こっちに来なかつたら後ろから一突きにしよつ、男の脂肪のある体と自分の体格を思い出して少しプランを変える、そうだ刺すなら急所を刺そう。

「何処かなあ僕の雌奴隸ちゃん…出てこよお…」

さつきまでブツブツ咳いていたのが嘘のように元気な太つた…「デブ、もう面倒デブでいいや。

これが世に言う内弁慶と言ひやつか?

「かくれんぼかなあ?どこかなあ

お腹がつつかえて机も覗けないとは、今は女だが元男としてちょっと可哀想になる、息も上がつてゐし、それは体力じゃなくて興奮からだと思いたい。

デブがとつた行動は後者、つまり背を向けた、なので後ろから突き刺すことにした。

「“じ”だ雌豚あー！」

おこおい、豚は“じ”ちだよ、と思いつつ走り出すとさすがに“じ”まで馬鹿ではないので「じ」を振り向く、でも遅すぎだ。

「ぎゅあああああああああーー？」

包丁がデブの膀胱に突き刺さっている、刺さった部分から血と小便と黄色い脂肪が普通に出てきた、別にそこまで勢いも強くなかったので少し面白くなかったがまだ殺していないので油断はしないことにする。

「あ、ああああーー！」

取り敢えずそこにあつたニッパーを拾つて鳩尾から包丁が刺さっている所まで脂肪を切り取る気持ちで引き裂いた。

思いのほか簡単に切れたが脂肪の上に自分の力では思いのほか致命傷にはなりにくく少量の血が顔にかかり引き裂いたところから黄色い粒粒、脂肪が顔をのぞかせる。

「おおーー！」

痛みで体をのけぞらせて倒れこむデブ、ラモやプラスチックの破片を巻き込んで倒れていてとても痛そうだ、土足で入ったのは正解だった。

「いだあああああーーぎゅああーー！」

「煩いなあ」

誰かがここに来るのも嫌なので殺すことにする、昔本で見た洋ナシ型肥満体系とやらのこの太った男性、胸は脂肪が少なく振り下ろせばニッパーで倒せそう。

と言つことで振り下ろす、ちょうど胸の真ん中なので心臓ではないが十分死ぬだろう、また血が飛んで私の頬についた、生暖かつた。

洗面台で顔を洗う、赤い血が水に流れて消えていく。

顔を上げて鏡を見ると可愛い、それも美少女と言う部類のロリコンが見たら放つておかない女性が存在していた。

服を脱いで血を洗い落としていたので上半身タンクトップ一枚で桜色の綺麗なあが見え隠れしていく興奮する、立つ物はもつないが。

「なるほどあが誘拐しそうになるのも分かる気がするな

ちらりと洗面所の空いたドアから外を見るとすでに事切れたデブが死んでいた。

鏡に田をもじると鏡の中の美少女もこじらを見る。

「はあ、マジかあ…」

頭を抱えると美少女も頭を抱える。
どうするかな…。

「取り敢えず身元が分かるようなものはないし…」

あー、どうすっかなー。

「とりあえず部屋を散策してみるか」

こうなつたらしたいことは全部しておこう。
そう思い立ちまだ見ていない部屋を我が物顔でまたぐ、当然靴は履いたままだ。

「お邪魔しまーす」

部屋に入ると一番最初に机の上にパソコンがデテンと存在感を主張しており近くで見るとマウスに白い垢みたいなものがこびり付いていた、オッパイパッドなんて買つ人いたのか。

「プラモかあー、プラモねえ」

先ほどニッパーとその他部品が落ちてたからプラモがあることは想像していたがいい方向で予想が当たった。

「戦争物が好きだったのかな?」

ガンダムもそうちがあの「テブ、体外である、節操なくプラモを集めている、作つていないものをあることから途中で止めたのだろう。物は大切にしない派なのか埃と傷が目立つ。でも基本は戦争物らしく私の考えていたものもありそうだ。

「ふむ、何処だらうか…」

あつたらあつたでいいのだが…探すのも手間だ。
埃のかぶつていない机の引き出しこうだらう?

「一段目…見なかつたことにしよう」

ああ、うん厨二病つて誰にでもあることだヨ、気にしないヨ。

「一段目…鍵か、ぶつ壊す」

道具箱に入つていたバールで無理やり開けるとそこにはお皿類のものが。

「コンバットナイフげっとお」

鼻歌交じりに動物の皮で出来た鞘からその刀身を抜き出す、包丁とは違い持ちやすく、護身用にはぴったりだった。

いやはや人を厨二病などと称したが自分も人のことは言えない立場になつてしまつた。

「後は金だな…」

以前の使用者の重量に草臥れてしまつた腰掛椅子はキイキイと動かすたびに悲鳴を上げる、私は銀色に光るナイフをクルクルと弄んだ

後、元の鞄に戻しベルトに付ける用の補助道具「J」とコビングに運んだ。

外はもう真っ暗だった、部屋を出るとき時刻を確認すると夜中の3時だったが全く眠くない、むしろ変な焦燥感が私を追い回す。

名前…なんだつけな…

少女の名前のことではない、自分の名前のことだ、そこだけがぼんやりとしていてよく分からぬ、まあテンプレテンプレと自分に納得させ歩き出す…

歩く…どこく…どこかく…目的は…ない…ただぼんやりといこにいても助けが来ないとthought。

とある憑依した2話

『感情がある人』

僕は感情がありません、いえ、間違えました感情はあります、でも感じないんです。

他人が成功しました、喜びます、でも喜んでません、見せかけだけの張りぼてです。

彼女が出来ました、彼女は僕とは上手くいっているのでしょうか？相手の感情が分かりません。

キスをしました、ファーストキスだそうです、よく分かりませんが、大切なもののようです。

死にました、涙は出ません、でも、横に誰もいません、よく分かりません。

墓参りに行きました、死のうかと思いました、でも理由が思いつきません、世に言う後追い自殺ですが悲しいと思わないでどうじようかと思います。

お腹が痛いです、刺されました、赤いです、分からないです、最後まで、涙が、出無いんでしょう、つか？

「何で泣いているの？」

誰が泣いているのでしょうか？

「ふむ、お金がなくなりそうだ…どうしようか…」

「のままでは生命の危機どころか、この話が終わってしまつ、おつと、やうこう話はダメだったか？」

「所で…何なんだろうな？」

私はその後お金を崩しながら右へ左へふらふらと放浪していた、憑依だか何だか知らないが私以外にオカルト、つまり妖怪とか神的何かとかそういうものは何一つ見当たらない、いまだに自分の名前も分からぬ。

「どうしたものか…」

この娘の親は搜索願を出していないのか、まったくそういう兆しがない。

「ここがどこかは忘れてしまったが、都市開発の進んだ町である、その繁華街に私は今いる。

「取り敢えず、ラーメンでも食べようかな」

私の目の前には美味しいそうなラーメン屋さんが建っていた。

醤油のいい匂いが私の腹を刺激し腹が鳴った、うつむきお皿だしこで食べることにしよう。

やれやれ、お金は後で考えよう、そいつよう。

「醤油ラーメン一つお願ひしまーす」

椅子に座つて人のよをひつなおじさんと頼む。

「はーいー醤油ーつねー」

この体は何とか一人で食事処に入つても声をかけられない、胸は小さいが背は大きいのが幸いした。

といつても机より頭一つほど大きいだけだが…自分で言つて悲しくなってきた。

「醤油ラーメンお持ちしましたー」

赤いどんぶりに入ったラーメンから醤油のいい匂いがする、美味しいそうだ。

「はふはふ」

おお、どんぶりが熱いから汁もラーメンも超熱い、こういふのは初めてだな…熱くて上手い、麺が太いのが少しあれだがそれは人それぞれと言うモノだな。

『市で起こつた殺人事件ですが犯人はまだ消息は掴めておらず、警察は被害者の知人の怨恨の線で捜査を進めています』

「んによ？」

物騒なことだ…思わず箸を置きテレビを見つめる、若いお姉さんがハキハキと情報を提出していく。

『被害者の緒方さんですが、最初の発見者の緒方さんの母親が見た時、緒方さんは全身を5~6回刺さされて死んでいました、今日はこの事件について 大学の犯罪心理学教授の近衛氏をお呼びしました』

テレビを見ると頭部が剥げているオジサンがスースを着て偉そうに喋っている。

『警察は怨恨の線で捜査を展開していますがこのことについてどう思っていますか?』

『ふーむ、その線は濃いでしょうな』

『ふむ、このオジサン私と同じ口癖を…むう。

『どうしてでしょうか?』

『被害者は喉から腹部をかけて何度も刺されていてそして股間の部分を包丁で深く刺されています、これはかなり恨みがあつた人間の犯行と思われます』

「うーむ、怖いことをする女性もいるものだ」

なんだか既視感を感じるが…。

『しかし被害者の宅からは30万円相当のお金とバックなどが盗まれているらしいですが』

『物取りの犯行に見せたかったのか、どうしても金が必要な状況だったのか…どちらにしてもこれから詳しい警察の調査で分かっていいでしょ?』

その他一切のことは分かりません!ってやつですね分かります。

『はあ……やうですか、貴重な意見ありがとうございました』

そして画面が変わり殺された男の写真が表示される。

「あ、あいつか」

そこには私が殺した男が写っていた。
取り敢えず麺が伸びるから食べよう。

「うーん……うと」

大きく背伸びして口差しを浴びる、口が臭い、今日は銭湯見つかる
だらうか？

出来れば健康ランドがいいなあ。

それよりもお金がないのをどうにかしたいな。

「ふむ、援交でもするか？」

何をバカなことを、と額を押されて低く笑う、この小さな身では引

つ掛かる密もいないだろ？、あの男みたいな存在は考えたくないが。

「どうするかな、つと」

フランフランと歩きまわり、ポールを綱渡りし、石橋の端を歩いて渡り、子供だからかは知らないがとても身体能力が上がった、鬼ごっこでは誰にも負けないだろ？。

「おお、公園だ、公園じゃないか、公園行こつか？いや行くべきだ
る？」

ん、これは反語じゃないな？まあいいか、道路に面した人気のない公園を見つける、ここで遊ぼうか。

公園の遊具で何が好きかと言つたらそりゃあフランフランだろ？、フランフランほど時間を潰せるものはないだろ？。

「よ…ほつ…うつやつ…しょつ」

フランフランの乗り方は言つまでもない、引いて押して引いて押してだ、それをするたびに少し出るお腹が可愛らしく、ふ、私は何を言つているのか、少し黙ろ？。

次第に大きくなるフランフラン、今の格好は茶色の縦セーターに短いスカートなので見えてしまつた、ああ、ついでに白だ、ん？聞いていなかつたか、すまん。

「…つりやつー！」

体重の関係上仕方がなくシートが半円を描くほどで限界が近づきや

「から飛び降りる。

しまった、下じゃなくて上に飛んでしまった。

私の体は空中で一回転して視界が空色と緑色と茶色と黒色でまばぐるしく変わる……黒？

トス、柔らかいものが受け止められる音と自分の体に走った軽い衝撃で驚いた。

黒髪を搔き揚げ固めてやぐら面した男が私を見下ろしている。

彼が私を受け止めてくれたらしい。

「ありがとう」

「…？」

私が感謝の言葉を言いつと心底驚いたといつ風に私をまじまじと見てくるヤンキー、きっと感謝されることになれないのだろう、そういうだ。

「と」「る」

「なんだ？」

「その顔は人さらいか何かかね？」

「お前…アホだな」

この反応と見るにただのヤンキーと並つわけでもなさそうだ、変態つぽいけど。

「ほほう、アホとな、何をもって私をアホと評するのか理由を要求するよ」

「普通泣くか騒ぐへりこあるだろ、とにかくいついつ見えるんだつたら言わないだろ?」

「ふ、それこそ阿呆だな、私は見た目で人は判断しない……多分それに中身が子供じゃないからな、相手とときはもつ怖くないぞ、いろんなことがあつすぎたよ。」

「多分か?」

「誰だつてレイプ魔に近寄りたくないだろ?だから多分なのぞ」

「まあ……やうなのか?」

「そんなものかレイプ魔さん」

「ニヤリと笑うとやんなことを言われるとも思わなかつたらしい男は驚き口を開ける。

「んなあつー?」

間抜けた声と共に驚きで腕の力が弛み私は身を捩り地面に着地して一端彼我の距離を取る。

「どうして俺がレイプ魔なんだ！」

「ふむ、レイプ魔じゃないと主張するかね？べたべたと触つておきながら、このスケベー」

体を抱く振りをして身をくねらせる、口コロコロはこれで顔を赤くする、じこつはどうかな？

「おいら大人をあまりからかうんじゃないぞ。」

「いやかに笑う彼、くく、確かに子供が見たら泣くな、それに口コロコロじゃないらし。」

「ふふ、21歳なんてまだまだ若造れ」

「なんで知ってるんだよ……」

「勘だ」

（21）的な感じで言つてみたんだがあつてるとほん

「とにかく21歳の若造が私に何か用があるのかい？」

「用も何もじんな時間に子供がつらつらもんじやないだらう、まだ学校の時間だらう？」

「さあどうかなあ、もしかしたら早めに学校が終わったのかもしれないよ？といつより君の風体を鏡で再確認してからもう一度その言葉を吐くんだね」

「うつせえ、顔は元からだ、それだったらお前以外の子供がいるだら」

「ふむ、君は実に面倒くさい性格だね、でも馬鹿でもないし、そこまで不良でもないらしい」

「おい」「ひ」

無視してバックを置いてあつたベンチに座る、ブレーケアは飲んでおいたから大丈夫、臭くない……多分、つい氣にしてしまい息の匂いを確認する私、ふむ、臭い。

もう一個ブレス アを飲む、ラーメンはダメだつたか。

「お前、人に嫌われるタイプだろ?」

私のあまりの物言いにジト目になる。

「ああ、どうかな? 人にもよるさ」

誰にだつてこの口調なわけじゃない。

「ジュース飲むかい?」

カバンから出したヤクルトを進める、乳酸菌、きっとあれが膨れるはず乳だけに… すまない面白くなかったな。

「お、おう?」

私から受け取ったヤクルトを普通に飲み始めるヤンキー、こいつ面

白いな。

「……」

「……」

一人の間をしばり無言が占める。

「なあ」

「ふむ、何かな?」

「お前虐められてんの?」

「ふーむ……」

確かにそつとも取れるな、でもこの場合誰に虐められているかと
なるのだろうか?神様は訴えられるだろうか?

「まあ……虐められてると言えば虐められてるかな?」

「やつぱりか、なら俺が助けてやるよ」

「ほほう、それが漢気とやらかね?それとも人をうごの甘い言葉か
ね?」

「なわけねえだろうが、俺はまだ犯罪者にはなりたくないねー」

私は犯罪者だがね、それでもいいといふのなら。

「やつが、なり家に泊まりせてほしい」

「ちょうど家がなくて困ったんだ、しばらく泊めでもいいでないか。」

「え？」

助けてくれないのかね？」

『愛する人』

他人を愛するとはどうことであらうか、人は愛と言つた言葉をどうも難しく考えるようである。

自分を愛する人を思い浮かべてみた、お世辞にも誰よりかわいいとは言えないが、私の理想とする人であることは確かである。

理想、これこそ浮気の原因であらう、理想とは変化するもの、上がるもの、際限のないものだ。

全くもつて愛とは難しくはない、むしろ簡単である、まあその後が大変であることは誰でもわかることだが。

『愛は不变である』誰が言つた言葉だらうか、そんなことは無いと思つが。

『愛と欲は違つ』これも誰かが言つた言葉だ、私からしたらどちらも変わらないと思つが。

私が思うに『愛』とは『理想』だと思つ、何故なら自分の理想を愛せない人などいないのだから。

「ほう…これはなかなか…」

いい家だ、彼以外誰もいないのかね？

それにしても一戸建てとは意外と金持ちだな、ちう、ブルジョワジ一め。

「あーまあ、なんだ？上がるか？」

面倒くさそうに頭を搔いて言つ彼、搔き上げていた髪はボサボサになり彼は少しだけ友好的な顔になつた。

「本当に襲わないだろ？？」

私は身を抱いて疑問の視線を投げかけてみる。

「襲わねえよバーク」

実は道中同じ質問を4・5回したのでもう面倒くさいといった体で答える彼。

「冗談だ、襲われても覚悟はできているわ」

殺す覚悟はね、そつ心中で思いバックの中のナイフの感触を確かめ安堵する。

「……呆れてものもいえねえ」

頭を抱える彼、まったく軟弱な奴だ、昨今の男子は弱くていけんな。

「それこそ何の『冗談だい』

ズボンから鍵を取り出す彼は…んー、何どこうか『ジャガだね。

「とこりで相手は何て読むんだい?」

扉の横の表札を眺めながら彼に疑問を問い合わせる。

金属製のプレートには『布袋』と書いてあつた、読めぬ。

「ふふん、読めないのか?」

ほほう、それはなんだい?私への挑戦かい?

「つ…んと、布袋…いや違うな…布袋かな?」

語呂的にひのひのひが良くな、なうきつとやうだうか、やうに違
いない。

「おお、すげえなあ」

馬鹿にしないでもりたいな。

「ふふん、じつ見えても君よつ漢字まだかれるつもりだよ」

「へえそりゃあすごい」

信じていらないな、まあこの体じゃ仕方がない。

「ねえ」

「ん、なんだ?」

「名前…君の下の名前は?」

玄関の鍵を開けてドアを開ける彼、彼の名前は?

「勇だ」

「勇、か…いい名前だね」

「ありがとよ、ガキに褒められても嬉しかねえけどな」

先に入ってしまった彼を追いかけて家にお邪魔する、綺麗だ、あの部屋とは違うな。

「ソロには一人で?」

「いや、母親と父親がいるんだが一人とも旅行で滅多に帰つてこない」

何と言うテンプレ、この人間はあれだな、主人公ってやつだな、本当に面白い世界だ。

「ふむ、それはまあ何というか、テンプレで

「テンプレ？あーまあ、そうだな」

「お願いだから襲わないでくれよ？」

「だから誰が襲つかつての、信じるよ」

いや、そんな強面信じつけて言われもねー。

そいつは最初ブランコで遊んでいた。

腰まで届く黒い髪と上品そうな可愛らしき顔立ち。

周りには誰もいない、当然だまだお皿を過ぎた頃、そもそもこの公園に人なんて滅多に来ない。

だから俺も来たのに。

少女はブランコを漕いで何が楽しいのか笑っている、どうしたのだ

るつか。

突然少女は手を離しブランノから飛び出す、空中で一回転、黒い髪が空中で弧を描く。

気が付けば飛び出していた、その子を受け止めなければいけない気がした。

彼女の体はお世辞にも軽いとは言えないけれど、重さなど全く気にならなかつた。

「ありがとう」

「…？」

驚いた、心底、今までお礼を言われたことなんてほとんどない、本当にびっくりだ。

この後家に泊めてくれなど言つからもつと驚いた。

つい家に招き入れてしまつたが大丈夫なのだろうか、犯罪じゃないのか？

「気持ち良かつたよ、あつがとつ」

「あ、ああ」

何を勘違いしてこる？風疋だよ馬鹿。体からラーメンの匂いが少しだものでね。

何のじとかわからぬい？嘘はよくないな。

「いやあ、助かったよ、このままでは私は援助交際をする羽田になつてたのでね」

「ふつ」

勇が噴出して唾が飛ぶ、ああ汚い。

「汚いなあ、唾はそのままで綺麗なものでもないんだよ。」

「こや、お前気に入らねえのかよ」

やつらにながらトイ・ヤ・シ・ショウで自分の出した唾を吹いてこく、うつむ、シュー・ルだ。

「まあ今更気にする」とでもないだろつ、分かつてやつてこぬよ

「分かつてんのかよ… ガキっぽくねえな、いやむしろガキっぽいのか？」

「ふふ、ガキとは失礼な、私はガキじゃないよ」

「はいはい」

全く敬意を感じないな、駄目な奴だ。

勇が座つているソファに腰掛ける。

「何のゲームだい？」

ソファの前にある大きな液晶テレビでガンアクション系のゲームをやつている勇。

「ガンサバイバー」

「ふーん」

勇の横に座る、今着ている服は私よりも大きいが着れないわけでもない、ただ少し古い型なのか箪笥の匂いが染みついている。

「君には妹でもいるのかね？」

「姉貴がいた、それはお古だけどな」

ゲームの中の主人公がいつたん停止し、また動き出す。

「いた……」

「まあ気にするせじでもねえよ」

「わづかー」

「ああ」

私は何が言つてもなく静かに彼の横で座つてテレビ画面を眺めている、主人公がナイフと銃で敵を殺している。

「名前…お前名前は?」

勇が私の名前を問い合わせてくる、これは痛いことを聞かれたな。

「私の名前…」

本当に、誰だのだろうね、私は?
この娘ではないのは確かである、しかし確固たる確信もなく私であるとも言い難い、いやそもそも私とは誰なのだ?

いつそのこと魔法やら超能力やら超常の力があればこんな状況も受け入れられたものを。

「どうしたんだ?」

「ん…いや、なんでもないよ、名前だったかい?……君に教える必要があるのかな?」

「いや、お前だって俺に名前聞いたじゃん

「ふむ、それとこれとは話が違うのでは?」

方や小学生、方や大人、襲われたら私はどうしようもない、まあそんなことは関係なく名乗る名がないからなんだがね。

「ああ、そうかいそうかい、まあお前の名前なんか知らなくていいか」

「ああそうだ必要ないな一人しかいないのだからおいとかお前でいいだろう、うんそうしよう、それがいい」

これは一人の間のルールだ、一人だけの、いつ決めたか？ 今だよ、今この時から。

勇に寄り掛かる、肩が彼の体にちょっと触れるだけ、そのぐらいの接触でも彼の熱は確かにあって、このあやふやな世界を正常に戻していく気がした。

狂つてしまいそうだ、もしかしたらもう狂っているかも。

安堵から眠気が襲つてきた、このまま寝てしまつのも悪くない、ああ、悪くない。

彼に寄り掛かりながら久しぶりの深い眠りを味わうことにしてしまう。

「おい」

彼が突然話しかけてきた、もう田舎を開けていられない。

「なんだい？」

暗い視界の中で囁き聞こえた言葉は。

「お休み」

「……ああ、お休み」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7850y/>

どこかの世界の愚かな人

2011年11月23日13時46分発行